

に『少し早い草臥れたからモー寝ませう』と言ふのに代へたのであるらしい。罪のない洒落ではある。

白炭や彼のうらしまか老の箱

白炭は枝炭で、細く白く、普通の炭の上に置いて爐の火を起す爲めに使ふものである。其白炭の白い所よりして、此白炭は彼の浦島太郎が龍宮より歸つて玉手箱をあけた時に俄に老年になつて頭の髪も白くなつたと傳へられてゐるが、玉手箱をあけた浦島太郎の頭にも似たるものである。浦島太郎が玉手箱をあけて、年老ひた時の頭の白いのと、此炭の白いのとは同じやうでもあつたらう、否な此炭は浦島太郎が玉手箱をあけて老ひた時のそれと同じであると云つて興

じたのであらう。比喻が聊か突飛で滑稽である。

張笠の説

世にふるも更らに宗祇のやどり哉

張り笠は張つて作つた笠。それに就いての説を書いた、其後に書きつけたといふ前置で、芭蕉は甲州の人に貰ひし檜笠を紙で張り澁を塗つて愛したさうで、其説として

草扉にひとり詫びて秋風さびしき折々竹取のたくみにならひ妙観が刀をかりて自ら竹を割り竹を削つて笠づくりの翁と名のる、心しづかならざれば日を経るに物うく工みつたなければ夜をつくして成らず、晨に紙を重ね夕にはして又かさねく澁と

いふものをもて色をさらし、ますく、かたからんことを思ふ二十日過るほどにや、出来にければ其形うらの方にまき入外さまに吹かへりなど荷葉のなかば開くるに似てなかくをかしき姿なり、さらずばすみかねのいみじからんよりはゆがみながら愛しつべし西行法師の富士見笠か東坡居士の雪見笠か宮城野に供つれねば吳天の雪に杖を曳かん霰にさそひ時雨にかたふけ徐ろにめで、殊に興す興の中にして俄に感ずる事あり再び宗祇の時雨ならでも假のやどりに袂を濡して自から笠の内に書きつけはべる

とある、其奥につけた句である宗祇に『世にふるも更らに時雨のやとり哉』といふ句がある。それを『やとり哉』とし、必しも宗祇の時雨のみならんや、假りの宿りとして、雨をしのぐ事が出来る、袂はぬれるかしらぬが、先づ假の宿りとするには十分である、さてく面白事ぢやと言つて、張笠に對し興じたのである。

しもがれに咲は辛氣の花野哉

冬の霜にかれた野に尙ほ咲きのこる草がある。其草の花が咲く様は極めて辛氣である、辛うじて花をさいてゐる、さうして花野を見せてゐるといふので冬の初めの野のあはれな様を言つたのであらうが霜がれといふ冬季と花野といふ秋季とを用ひてゐる所から、辛氣なといふ俗語を使つた所、且つ全體の極めて幼稚にて俗氣を帯びたる

所などより察するに、芭蕉の句でないかとも思ふ。

浪の花と雪もや水にかへり花

此句は徒らに詞を弄んで興じたに過ぎぬ。浪の花にならうと思つて雪は水に歸る事であらう、雪の花は海に入り浪の花となるべく水に歸したのであると言つて打興じたのである。かへり花は小春に狂ひ咲く花であるが、こゝでは實際に其歸花を見た感じを現したものとなつてゐない。かへり花といふ語より、斯る文字上の娛樂をやつたのみである。

けさの雪根深を園の菜かな

けさの雪は根深が園の菜となつてゐる、園へ行く途は雪が積つて、

何れが道であるかもわからぬ、唯だ其處に根深即ち葱がある、其葱が雪に埋もれずに居るので、それを園への菜として行く、園へ行く菜に根深がなつてゐると云ふのである。葱が埋み残されてゐるとすると、極めて浅い雪である。初雪の趣かとも思はれる。併し葱が埋みのこされてゐる程なら園の木などは無論埋み残されてゐるのである。唯だ冬の庭の何物もなきに、根深のみがあつて、その青いのが白い雪の上に少しばかり出てゐるのを美しと見たのである。根深の深と雪の深きをかけ合せた洒落ではない。純然たる客觀の景色で、落付いた句ぢや。

耕月亭にて

雪をまつ上戸の顔や稻光り

耕月といふ人の家で作つたといふ前置である。

雪を待てる上戸即ち酒のみの顔を見ると、其顔には稻光がしてゐるといふたのである。耕月亭で酒宴を開き饗應を受けた、折ふし寒い日で空は雪もよひである、何れも上戸で頻りに盃を含んでゐる、さうして酒の爲めに耳も熱し、寒さも覚えぬ、一層雪でも降つて來ればよい、然らば其雪を着に酒をのみ興する事が出来る、どうか雪の降れかすと雪を待つてゐる、其人々の顔は電光の如くである。即ちピカ／＼してゐるといふので、何れもの顔が酒に元氣づいて、寒さにもひるまず、照り輝いで居る様を、稻光りなど、誇張して咏じたのである。其の誇張した所が詩的手段である。

時雨をやもどかしがりて松の雪

たのである。其の誇張した所が詩的手段である。

此句は非常に時間を含んでゐる句である。即ち今見ると松に雪が積もつて居る、此の雪は、時雨をもどかしく、はがゆく思つて降つたのである、と言つたのである。故に今迄久しく此松に時雨の降つた事をも現してゐる。作者は此松に時雨が降りかゝるのを度々見てゐた、所が或朝見ると雪が降つて居つた、其處で、今迄に度々時雨が降つたけれど、時雨では埒があかぬ、それを雪が齒痒く、もどかしく思つて今朝は雪が降つたのであると、雪を擬人したのである。其處に面白味があるのだ。

あられまじる帷子雪は小紋かな

此句は又た難澁な句である。あられ交りに降る雪は帷子に小紋を置いたやうなものである、あられは帷子で雪は其の小紋になつてゐると形容したのであらう。即ち霰のハラ／＼と直線に降る處は帷子の縞目と見、雪はポタ／＼と其の小紋の如しといふのを斯様に詞を曲折前後させて興じたのに過ぎまい。

黒森を何といふとも今朝の雪

黒森と呼ぶる、森がある。彼の森は人が何と言ふても、今朝は雪が降つて白くなつてゐる。人は如何に彼の森を黒森など言つても、今朝は仕方がない、黒森でない、雪が降つて白森となつてゐるといふ

洒落に過ぎぬ。幼稚な處には却つて一種のをかし味のないでもないが、さりとして賞すべき句ではない。

子に後れたる人の許にて

しほれ臥すや世はさかさまの雪の竹

自分の子供を先立たせ、子を失ひ、其子に後れ、跡に残つた人、といふので、子を失ひし人、その人の許で作つたといふ前置である。句は雪が深く積もりて、竹は撓み臥してしまつた、其撓める所は、全く倒さまである、世は倒さまの事が多い事ぢやと云つたので、表面は竹が雪に枝折れ臥した景色を詠じたに過ぎないが、前置のあるよりして裏面には自ら悼悔の意を含ませてゐる。即ち世の中はさか

さまである、先きに死すべき親が死せず、却つて若き子が先きに死する、左様な逆縁に會つた君は、雪を受けた竹の如くに萎ほれ臥し落膽して居る、實に氣の毒千萬同情に堪へぬ。何故に人生は爾く思ふ儘にならぬのであらうか。といふやうな意を含ませて、其の人に對して悔みを言つたのである。一層の事あきらめよとか、或は人生の常だから落膽する勿れとか言はずに、何處迄も其人と共に悲みを分つてゐる切なる情が十分に籠つてゐる所は芭蕉の人格を十分に發揮してゐるのである。

笠の緒や咽喰しむる不二の雪

笠を着て旅をして居る。折ふし寒い冬である。笠の緒を願へかけて

ゐる。其の緒が咽を喰ひしめる、咽を締めるやうになる、向ふを見ると、不二の山には雪が白く積つてゐた、といふのである。寒い北風などの爲めに笠が吹かれ、其爲めに其緒が咽を喰ひしめるのであらう、兎角に荒涼たる心淋しき旅の心持である。其の淋しく苦しい旅を眞から苦しい淋しいとは思はず、其内に一種の哀愁を感じるのを寧ろ面白き人の世と見たのである。

雪花は南の枝やおそざくら

此句は何の事を言つたのか殆んどわからぬ句である。雪花は雪といふも同じである。雪が南の枝に積つた、遅ざくら即ち遅く咲く櫻が其處にあるといふのであるからして、何の意味かわからぬ。雪のふ

る頃に咲く櫻はないから譯がわからぬのである。或は雪花のつもりし南の方の枝は、遅ざくらのやうな趣があると言つたのかもしれない。遅ざくらは、八重の濃艶な花である。積りし雪の枝を、それに似たと言つたのかもしれないけれども、それにしては言葉が足りないやうである。何しろ價值のない句であると思ふ。

みちのく名所の内猫山

山は猫眠りはひてや雪のひま

陸州の名所の句を作つた其内に猫山といふ名所の句といふ前置である。芭蕉の自身に書きし前置でなく、一葉集編者の説明である。山は猫である、猫山である、其猫山は眠り這ふてゐる、長く體をの

ばし這ふて眠つてゐる。雪の間に眠つてゐるといふたので、猫山といふ名よりして斯様に興じたので、格別面白い句でもない。

雪の日や羅紗の羽織にたゝき鞘

雪の降る日に、羅紗の羽織を着て、刀はたゝき鞘を佩て行く人があ
る、如何にも武張つて勇ましき姿である、彼の雪に凜々たる姿、誠
に似合はしき事であると感じたのを、其主觀を表面に言現はさず、
單に羅紗羽織にたゝき鞘の刀さした武士が雪に降られてゐるといふ
客觀の景色だけを叙して、其裏面に主觀を藏せしめ、讀者の推察に
委せたのである。所謂客觀を通じて主觀を現はしめるといふ手段で
ある。よい感じのする句である。

夜着は重し吳天に雪を見るあらむ

着て寐てゐる夜着が重苦しい事である。今頃には定めし吳天、即ち唐の空には雪を見る人もあらう、吳の國の天には雪でも降つてゐる事であらう、自分も旅人となつてゐる、故郷を離れて吳天ともいふべき旅の空に居るのである、此の夜着の重き心持から察するに、外は雪の降つてゐるのでもあらうか、寒く苦しい夜であるといふのである。何となく餘情がある。

雪の竹笛作るべう節あらむ

雪の竹、雪の降りかゝつた竹、其竹には、笛を作るべう即ち笛を作る可き節がある事だらう、と即興的に咏じたので、何の深い意味も

なく單に雪に臥す竹を見、竹より笛を思ひ出で、興じたに過ぎぬのであらう。或は下五の節あらむは節があるだらうといふ疑問でなく、節があらくなる、節の間が伸びる、といふ意であるかもしれぬ。即ち雪が竹を撓めるから自然節の間が伸ぶやうな感が起るのであるかもしれぬが、マサカ斯様な際どき洒落を言つたのではあるまい。矢張り前解が穩當ぢやと自分は思ふ。

ゆきの朝ひとり干鮭をかみ得たり

雪の降る朝、獨りで、干鮭を噛み得たと言ふたので、雪が降つて寒い朝に、妻もなくば子もなく僕もない、唯だ獨りで庵に佗び住んでゐる。左様の境涯であるから、雪の朝なども愈々寒く淋しい思ひを

するのみ、又た食ふものとても碌なものはない。然るに此朝は干鮭を噛み得た、干鮭を噛む事を得た、常には無きに此朝は幸に干鮭があつた、此の干鮭を噛みて、雪を賞する事も出来た。といふので、佗びし生涯の様と、それに寧ろ安んぜる様と、雪の朝のや、心の生々してゐる様と、干鮭に満足して得意な趣とが、躍然として現されてゐる。可なり力強い句である。

名所八體の内

松島や雪の白地の衣くばり

名所八體の内といふ前置は、芭蕉の書いたのでなく例の一葉集編者が書いたのである。即ち名所八體と題せる句の内に、此句もあつた

といふ説明である。

松島は陸奥の松島、其松島は雪の白地の衣配りをして居る、松島に雪の降つてゐる所は、眞白である。眞白な島が幾つもくももある、それは丁度白地の衣を配つたやうである、と言つたのである。衣配りは、年末に親しき人に衣を贈與するのである。決してアチコチに衣の散亂するのではない。然るに松島の雪を白地の衣配の如しと形容せる如きは、拙も拙も拙の極である。さうして何處となく厭味に満ちてゐる。決して芭蕉の句ではあるまい。一葉集の編者の杜撰に相違ない。

千代をふる天のてんつるあられ酒

此句は寧ろ狂句に近い、即ち千代をも経る天をかける鶴といふのを、
 ●●●●●●
 天のてんつるなど、狂じ、あられ酒即ち奈良の都の名物たる霞酒を
 飲めば、鶴の如く千年の齡を経る事も出来るだらう、それほど甘い
 酒であると云ふ意を斯様に狂句めいた句調で現したのである。詞を
 弄んだのみで、何等實質のない、輕薄な、感心されぬ句である。斯
 る句を芭蕉の如き人格の高い人も作つて興じた事かと思ふと聊か笑
 はれもするのだ。

わすれ草菜飯につまむ年の暮

年のくれに、わすれ草を菜飯につまんで喰ふたといふのである。わ
 すれ草は煙草の異名ともなつてゐるが、煙草の外にわすれ草といふ

植物があるのである。それを喰へば人をして物を忘れしめると言傳
 へられてゐる。此句に於ては煙草の事か、眞の忘れ草の事か、何れ
 ともわからぬが、菜飯につまむといふよりせば、煙草ではあるまい、
 煙草を菜飯と共に食ふわけには如何に元祿時代の人でも出来ぬ藝だ
 らうから。然らば忘草を菜飯につまみかけて喰ふたといふ事にする。
 忘草などを、飯の上へかけて喰ふ如き事が實際あつたものか、それ
 も頗る疑問である。忘草は毒草である。それを飯にかけて喰ふなど、
 之も如何に元祿時代の人だからとて聊か閉口だらうと思ふ。故に此
 句は菜飯を喰ひ、物を忘れるといふ煙草ものんだ、年のくれに於て
 といふ位の意であらう。年の暮に、年を忘れるといふより斯く言つ

たのであらうが、如何にも拙な趣向で、俗臭が多い。之れも芭蕉の句らしく思へない。

此わすれ流るゝ年の淀ならん

此のわすれ、即ち年忘れをするのは、流れ行く年の淀であらう、年の波が流れ行き、それが行きつまつた所であらう、年の末であらうといふたので、是れも極めて平凡な事を言葉を曲折し、わかり難いやうに言つたに過ぎぬ、愚劣な句である。

乾鮭や何がし殿は毛唐人

乾鮭がある、何がし殿は毛唐人である、何がし殿は西洋人のやうである、即ち普通の人でなく、少し變つた人を毛唐人など言つた所か

ら、實際に西洋人でないが、斯様に言つて興じたのである。句全體から考へると、乾鮭は毛唐人の趣に似てゐる、何がし殿は毛唐人である、故に彼の人は又乾鮭に似てゐる、乾鮭と何がし殿と毛唐人、面白い對照であると打興じたのである。乾鮭を毛唐人と見立てるなどは奇想天外で思はず失笑せしめる。

なりにけりなりにけりにて年の暮

讀んで字の如く斯くくなりにけり斯様になつてしまつた、モ一秋になつてしまつた、モ一冬になつてしまつた、斯様に度々、なりにけり、なりにけりと言つて來て而して遂に年の暮なりにけりとなつた。年の暮になつてしまつた、愈々今年も暮れてしまふた、と言

ふので、年の去るの、速かな事を言つたのである。極めて平淡であるが、而かも厭味はない、年の暮の感を十分に現して居る句ぢや。

一休が土器買はん年のいち

年の市は、年の暮れに市を立て、新年所用の品物を賣買するのである。其の年の市に於て、一休の土器でも買はう、一休といふ禪僧の土器でも買はうと言ふので、佗びたる生涯であるから、普通の浮世の人のやうに、新年のもうけもする必要がないから、年の市に於ても格別に買求むべき物もない、其處で土器でも買はう、土器より外には買ふものも無いと言つたのである。一休の土器といふのは、一休和尚の作り初めた土器といふのであるか、即ち土器の一種であ

るか、或は又昔し一休和尚の使つた土器といふ意であるか、何れとも不明である、何れであるにせよ、單だ粗末な佗しい土器といふ意に外ならぬのであらう。單に土器と言ふたのみでもよいのであるを
 ●●●一休がとして土器にも色をつけたのであらう。『年の市、線香買ひに出でばやな』といふ翁の句と同一趣向であると思ふ。無論一休其人
 が土器を買う事であらう此の年の市に於てはと歳暮に一休を想ひやりし意ではあるまい。

無季の部

かちならば杖突坂を落馬哉

春夏秋冬の何れにも入らぬ、季節のない句、それを集めたのである。句の意は、徒歩であれば、杖を突いて、ゆるく歩行く坂である、此處は杖突坂といふ地名であるから、自分も杖でも突いてゆるく行く事であるに、今は落馬をした。即ち徒でなく馬に乗つて来た爲めに落馬をした。馬などに乗らずばよかりしものを、杖突坂とさへ言ふから、杖突いて徒歩で来ればよかりしに、馬に乗つた爲めに、落馬をして痛い目に會ふたのぢやと、言つたのである。

朝よさを誰松島ぞ片こゝろ

朝の景色の餘りによろしき爲めに、誰れの來るのを待つて居る事であるか、こゝは松島である、其松島の朝のけしきに對し、片心である、即ち全心を景色に傾注せず、半分の心を景色に他の半分の心を待つ人に傾け、所謂片心で、うつとりして居る事ぢやといふたのである。人を待つと松島とをかけ、片男島を片ゝごろと洒落たので餘り感心しない句である。

酒のみ居る人の繪に

月花もなくて酒のむ一人かな

酒を飲んで居る人の繪がある、其繪に贅をしたといふ前置。

月も花もない、何も無い、それで只一人酒を飲んでゐる、月に對し、それを賞するとか、花を見て愛するとかいふのではなく、單だ酒を飲んでゐる。それも友と飲むでなく、獨りポツチで飲んでゐる。さて、此男の心は如何なものか、をかしき事であると不審をしたのである。

貞徳宗鑑守武の畫像

三翁は風雅の天工をうけえて心匠を萬歳に傳ふ、此かげに遊ばんもの誰か俳意を仰がざらんや

月花のこれやまことのあるじ達

貞徳と宗鑑と守武の畫像に賛をする、此三人の翁は風雅の道の天工

を受け得て、天から此道を授かつた人即天才であつて、心匠即ち作品を萬歳の後に迄も傳へた。此かげ即ち三翁の風雅の道、俳諧の道に遊ばん人は、誰れが此の三翁の俳諧の意見を仰がぬものがあらうか、皆な此三翁の趣味を仰ぎ、それを祖として尊敬するのである、といふ前書である。

句の意は月や花などの眞の主人は月や花や其他のものではない、貞徳、宗鑑、守武の三人が月や花の主人公である。三人は花月の主人達であるといふたので、即ち風雅の道の主人、此道の祖たるものは、此三人であると言つたのである。

題花生

此槌のむかし椿か梅の木か

花活に題をしたとの前置

此槌と言つて居るから、花生は槌のやうな形をしてゐたのであらう、それを槌のやうなと言はず此の槌と言切つた所は思ひ切つて居る。さうして此花生は、昔しは椿の木であつたか、梅の木であつたのか、何れであつたか、兎角に花をつけた木であつたらうに、今は槌のやうになつてゐる、而かも花と縁を離れず、花をいける器となつてゐる。面白い事ぢやと言つたのである。花生の贅としては實に變つてゐて面白い。

四山の銘

物ひとつ瓢はかろき我世かな

芭蕉の瓢に素堂が命名して、四山と言つた、それは其瓢の形ちがいろくの山に似てゐるからで、即ち重黛山、箕山、首陽山、飯顆山と斯う四つの山であると言つた。其の四山の瓢に銘をするといふ前置である。

句の意は、吾生涯は軽い事ぢや、物が只一つぢや、其物は瓢である、軽い瓢である、此の軽い瓢が吾家の什物で、吾生涯は軽いものである、此他に何物もないのぢやと言ふたので、如何にも佗人の氣樂な境涯が、よく現れて居る。

布袋書讚

ものほしや袋の中の月と花

布袋の畫に賛をしたといふ前置。

句は布袋の畫を見、其の袋の大なるを見て、彼の袋の中のものが、欲しい、物欲しい、もらひたき事である、彼の大き袋の中には定めし月と花とが充滿してゐる事であらう、其の月と花とが欲しい事ぢやと言つたのである。袋中のものを米とか金とか想像するのは俗人、流石に詩人だけに月花であらうと見た所が面白い。米や金なら欲しくない、月や花で即ち風雅の道なら欲しいのぢや。こゝらにも人格の現れるものである。

考證

考證は一葉集編者が考證して掲げたので、各季の後にある以外更らに卷末に出てゐる。是等は一葉集編者すら疑はしき書に見えたる句或は行脚の話、俳人の語等に傳はるもので悉く翁の句として信す可からざる旨を述べてゐる。従つて翁の句として解釋する價值もないやうであるが、中には翁の句と思はれるもあるから、序に之をも解釋を加へる事にした。

越の新潟にて

海に降る雨やこひしき浮身宿

越後の新潟で作つたといふ前置。

海に雨が降る、其雨も戀しい、自分は宿に浮身を托してゐるといふので、無季の句で而かも平凡極る句である。翁の句ではあるまい。

我爲めに日はうらゝなり冬の空

旅でもしてゐる場合であらう、自分の爲めに日は麗かである、冬の空で寒い日乍らも、日光が照つて風も強からず麗かである、爲めに旅の足も氣持よく運ばれるといふ意である。元來麗かは春季である。それを冬季へ持つて來た所は思ひ切つてゐる。冬でも麗かと感ずる日和があるものぢや、其實況よりして、感じ其儘を季に頓着なく咏じた所は大膽である。其爲めに冬の或場合の趣が、よく現れてゐる。

芭蕉の句とし差支あるまい。

深草やこれも淺草火鉢かな

深草は京都の南郊の地名、淺草は東京の地名。こゝは深草である、併し使つてゐる火針は淺草で出来る火鉢である。ハテをかした事と言つたのである。深草と淺草の二つの地名から斯る馬鹿氣た洒落を弄したに過ぎぬ。京都の深草で、東京の淺草火鉢を使ふやうな事が、元祿當時に、實際にありたりとは兎ても想像されぬ。即ち此句は實際の句でない。單に深淺の言葉から斯る洒落を言つたのみである。芭蕉の句ではあるまい。

馬ほくく我を繪に見る枯野哉

はじめは夏野と云吟なれど一直有しにや猶書賛とあれば訂正の爲め爰に擧ぐ

送り書きは、最初は『枯野哉』でなく『夏野哉』であつたが、後に一度直されしものらしい、尙ほ書賛といふ前書もあるから訂正の積りで此處に出したといふ一葉集編者の説明である。

句の意は、馬がほくくと歩行く、自分を繪中に見る枯野である、馬に乗つて枯野の中を行く所は其の自分が全く畫中のものである。此繪の中に馬に乗る人は自分である。といふたのである。餘り面白いと思へぬ。

餅花やかざしにさせる嫁が君

餅花は餅を小さく丸め柳の枝につけて小供が弄ぶものである。嫁が君は正月蓬萊鏡餅などにつく鼠の事である。其の鼠が餅花を簪として、さしてゐるといふので、嫁が君といふより、簪と思ひつきしのみで、是も實況の句らしくない。

大年の夜ぬすみにあひて

梅干にかよふ黄鳥あはれなり

大年は年の終りの日、大晦日である。其夜に盗人に會つたから此句を作つたといふ前置。

梅干に黄鳥が通ふた、あはれであつた、といふので何もなき佗人を

梅干に比し、盗人を黄鳥に比し、梅の花に通はず、梅干に通ふ黄鳥の氣毒あはれな如くに、富人の家に至らず、吾等如き佗人、貧人の家に忍び入りし盗賊は寧ろあはれ氣毒千萬ぢや何も取る者がなくて、徒勞であつたらうと、自己の盗みにあひしをば悔まずに却つて盗人を憫然に思つた所は面白い。併し其情を率直に現はさず、梅干黄鳥など言つて、多少謎的、判じ物的に現した厭味はある。

辛崎夜雨

琵琶の湖雨を疎顔が松の律

辛崎の夜の雨を詠じたといふ前置である。

此句の中七にある雨よ疎顔とあるのは、疎韻の誤である。一葉集編

者は句の意もわからないで顔と書いたのであるらしい。謠曲『蟬丸』に『第一第二の絃は、さく／＼として松を拂つて疎韻に落つ』といふ語がある。其語よりして此の句は出來たのである。即ち琵琶の湖に雨が降る。疎韻の松の律が聞かれる。辛崎の松に雨の降る音は、疎韻であるといふのである。謠曲の文句を其儘で何の手柄もない句である。芭蕉も斯る句を喜びし時もあつたが。

栗津青嵐

さぞ野分人の淡たつ市の聲

栗津は近江八景の一。其處は青嵐で有名。

さぞ野分が吹いた爲めに、人が泡のやうに立ち出で、群集し、市の

聲の聞える事であらう、野分には遠く大津の方の市の人聲も泡立つやうに聞える事であらうと言つたのであらう。餘り馬鹿氣た句のやうで翁の句でないかもしれぬ。

矢橋歸帆

夕がすみ赤石の浦を帆のおもて

これも近江八景の一つである。

夕方の霞が棚引いた。赤石の浦の方を帆の表とし矢橋の方を裏にして船が走りつゝあるといふので、これも平凡である。

比良暮雪

さそへ雲白衣の天狗比良の雪

是れも八景の一つである。

さそひ出せよ彼の雲よ、白衣の天狗を誘ひ出せよ、比良の峯の雪をばといふので、比良の雪を白衣を着た天狗であると形容し、それを雲に誘ひ出せよと命じて興じたのである。下十二字の白衣の天狗比良の雪と續けた所は實に拙も亦極れりである。前置に比良の雪とあるから、白衣の天狗と言へば、それで澤山、句中に重ねて比良の雪と現す必要はない。斯る拙劣な事をば芭蕉翁がやつた時代もあつたのか怪しく思ふ。

石山秋月

汐やかぬ須磨よ此湖秋の月

これも八景の一である。

此湖にも秋の月は出てゐる、秋月の名所は須磨の浦である。須磨の浦は鹽を焼く浦である。此の湖は鹽こそ焼かぬ、月の出てゐる趣は須磨にも劣らない、即ち此湖は鹽を焼かぬ須磨の浦であると言ふのである。豈又愚ならずやと言ひたい。鹽を焼かぬ須磨であるなどは月並も亦甚しい。斷じて芭蕉の句ではないとしたい。

瀬多夕照

遅き日にかはかぬ網の左り袖

是亦八景の一つ。

春の暮れる事が遅い日に、網の左袖だけ乾かぬといふたので、夕照

に對し漁夫が網を干してゐる景色である。其網を干してゐる景色を生かして、網が乾かぬ、未だ片方は濡れて居ると云つた所は働いて居る。寧ろ天明時代の人の句の如くで技巧を弄してゐる。

堅田落雁

鳥の文堅田の雁よ片便宜

これも八景の一つ。

此句に至つては言語同斷である。鳥の文鳥の手紙は堅田の雁と同様で片便りで、返事が來ぬといふので堅田とあるより片便宜[△]など續けたのである。趣向の月並なるは勿論、句調も月並、殆んど嘔吐を催す惡句である。芭蕉の句でないと言ひたい。

三井晚鐘

盃に片はれはなし花の鐘

右八景は宗房の時の吟なりと云

これも八景の一つ。送り書は、右の八景の句は、芭蕉が未だ宗房と云つて居つた時代即ち尙修業中で未だ名の顯れざりし時代の句ちやさうなと一葉集編者の説明である。

句の意は、盃に片割れの盃はない、花の鐘が鳴る、花下の宴の盃は片割れしたのがないと言ふだけである。

以上の八景の句は、宗房時代の句ちやとの説明はあるが、宗房時代の芭蕉は京都の北村季吟の門にありて國學を研究し傍ら連歌を學ん

で居つたのであるから、斯も發句をやつたとは寧ろ想はれぬのである。其句の拙にして月並臭の多きよりするも、決して芭蕉の句ではあるまいと思はれる。

九のとせの春秋市中に住わびて屋を深川の邊りに移す長安は古來名利の地空手にして金なきものは行路かたしと云ひけん人のかしく覺侍るは此身のともしき故にや

柴の戸に茶を木葉かく嵐かな

九年の春秋、即ち九年間、市中に住んで居つたが市中の居はわびしいので屋即ち家を深川のあたりへ移した。長安は支那の都の名、其都は古來から名と利益との地であつて、手の内が空しく金のないもの

は行路即ち暮し方が困難であると云つた人の言葉を賢しこしと思はれ、成程其言の如しと思はれるのは、此身即ち自分に金や才の乏しい爲めであらうか、然り錢も才も乏しき爲めであるとの前書ぢや。句の意は少しく分り兼ねる。先づ解して見ると柴の戸即ち柴を結び作つたやうな粗末な自分の庵には、格別他に變つた趣もない、唯だ茶の木があつて、其葉を嵐が吹き落して、其處等を掻き取らねばならぬやうな趣のあるのみであると言つたので、茶の木に冬の來て、茶の葉の落ち散つた趣なのであらう。

消息

三十里尾張大根のはなしかな

人に手紙をやつた末へ書きつけた句といふ前置である。

句の意は三十里も距つて居る、君の地と僕の地とは斯く遠くはなれて居る、三十里の外にあつて、自分等は尾張大根の話をして居る事ぢや、尾張大根の噂をして居る事ぢや、といふので、尾張に居る人に與へたのであるらしい。芭蕉が江州か又は伊賀の故郷に居りし頃に尾張の弟子共にでも與へたものだらう。即ち三十里の外に居りて君と相遠ざかつて居るけれど、君のみ頭に浮び出で、君の噂をして居ると言ひやつたのである。

畫贊

たのむぞよ寐酒なき夜の紙衾

前置は説明する迄もない、どんな書であつたかは句で想像される。即ち頼むぞよ、お頼み申ますよ、寢酒のない夜には紙衾どんにお頼みですよと言つてゐる。紙衾は紙で作つた夜衣で粗末なもの、其紙衾に對して、寢酒のない夜は貴様に頼むよと言つたのであるから、其繪は人の寢てゐる書である事が想像される。其繪に對して、此人は寢酒を飲まずに寢たものと趣向を立て、斯く詠じたのである。寢酒でもあらば、酒の爲めに暖く寢られるが、寢酒のない時には紙衾でも引被り佗しく寢るのみであるといふ佗人の境涯を現してゐる。

けし炭に薪割る音か小野の奥

薪を割る音がする。京都の西の小野といふ炭の名所の奥の方で左様

な音がする。彼の音は薪を割る者であらう、薪を割り炭竈に入れて、消炭でも作るものであらう、けし炭を作る爲めに薪を割る音に相違ないと言つたのであらう。幼稚な而かも感じの確かならぬ句である。

庵にうつりて

深川や根こしの芭蕉雪がこひ

庵に移つた時に作つたといふ前置である。句で見ると深川の芭蕉庵に移つた時と見える。句は深川へ芭蕉の根こしをした、根と共に芭蕉を移した、さうして其れに雪圍をしたといふので、其時の趣を其儘に叙したのである。

頭巾着た顔さしこむや繩すだれ

頭巾を着た顔を繩すだれへ差入れたといふので、寒さの爲め酒でも飲むべく繩すだれを垂れた店へ這入つたのであらう。

ふたゝひ芭蕉庵を造りいとなみて

あられ聞くや此身はもとの古柏

二度芭蕉庵を作り營みし時に作つたといふ前置。芭蕉は一たび結びし深川の庵を火に焼かれ、一時甲州に漂浪したが、再び歸つて深川へ庵を結んだのである。其時に作つた句である。

あられの降る音を聞く、自分の身は以前の通りの古柏であると言つて、庵は新たになりしも、人は昔しの其儘であるとの意を叙したのであるが、特に古柏と云ひ、柏を以つて自分に比したのは何故であ

らうか、聊か了解に苦しまざるを得ぬ。或は床の柱が柏の木でもあつたのでそれに常によりかゝり居りしより新しく言つたものでもあらうか。又た松柏の後凋といふ語もある。それより來たのか。柏は廟へ植ゑる木である、孔明の廟に植ゑたといふ古事もある。それよりして自らを聊か誇る所があつて斯く言つたのか。或は墓所に植ゑる木であるよりして、世を捨てた身を斯く言つたのか、兎に角明でない。

續芭蕉俳句評釋 大尾

大正二年七月十五日印刷
大正二年七月十五日發行

著者權所有

發兌元

東京市神田區
鍋町二十一番地

著者 寒川鼠骨
發行者 岩崎鐵次郎
印刷者 中島藤太郎
印刷所 神田印刷所

續芭蕉俳句評釋

正價金二十錢

著者 寒川鼠骨
發行者 岩崎鐵次郎
印刷者 中島藤太郎
印刷所 神田印刷所

大學館

電話本局三〇六七番
振替東京四五七番

俳句入門叢書

價各金二十錢
郵稅各金四錢

- 編第一 內藤鳴雪翁著 俳句 獨習
- 編第二 佐藤紅綠君著 蕪村俳句評釋
- 編第三 河東碧梧桐君著 其角俳句評釋
- 編第四 內藤鳴雪翁著 夏芭蕉俳句評釋
- 編第五 內藤鳴雪翁著 秋芭蕉俳句評釋
- 編第六 寒川鼠骨君著 俳句新歲事記
- 編第七 內藤鳴雪翁、寒川鼠骨君共撰 夏大家模範俳句集
- 編第八 內藤鳴雪翁題、寒川鼠骨君著 初學俳句案 內
- 編第九 內藤鳴雪翁、寒川鼠骨君共撰 (芭蕉)七部集俳句評釋
- 編第十 寒川鼠骨君著 秋大家模範俳句集
- 編第十 寒川鼠骨君著 大家俳句練習談
- 編第十 寒川鼠骨君著 明治大家俳句集

初學俳句叢書

價各金二十錢
郵稅各金四錢

- 編第一 內藤鳴雪翁題、寒川鼠骨君著 運座必携 俳句會必用全集
- 編第二 內藤鳴雪翁題、寒川鼠骨君著 芭蕉蕪村俳句全集
- 編第三 內藤鳴雪翁題、寒川鼠骨君著 (四季)芭蕉七部集、(分類)蕪村七部集 俳句全集
- 編第四 內藤鳴雪翁題、寒川鼠骨君著 四季分類 芭蕉十哲俳句全集
- 編第五 內藤鳴雪翁著 春蕪村七部集俳句全集
- 編第六 內藤鳴雪翁著 秋蕪村七部集俳句全集
- 編第七 寒川鼠骨君著 子規、鳴雪、碧梧桐、虛子 夏明治四大家俳句集
- 編第八 寒川鼠骨君著 寒川鼠骨君著 冬明治四大家俳句集
- 編第九 寒川鼠骨君著 寒川鼠骨君著 春明治名家俳句集
- 編第十 寒川鼠骨君著 寒川鼠骨君著 秋明治名家俳句集
- 編第十 寒川鼠骨君著 古今滑稽俳句集

初學俳句叢書

價各金二十錢
郵稅各金四錢

第十編 寒川鼠骨君著 子規俳句評釋

第十編 寒川鼠骨 椎名昇龍共編 俳句熟語字彙

第九編 寒川鼠骨君著 子規俳句評釋

第八編 寒川鼠骨 椎名昇龍共編 名所旅行俳句集

第八編 寒川鼠骨君著 芭蕉十哲俳句評釋

第九編 寒川鼠骨 富取芳河士共編 大祇俳句評釋上卷

第七編 寒川鼠骨君著 芭蕉十哲俳句評釋

第十編 寒川鼠骨君著 明治選者句集

第六編 寒川鼠骨君著 續芭蕉俳句評釋

第十一編 寒川鼠骨君著 續芭蕉俳句評釋

新俳句研究談

河東碧 梧桐著 價各金三十五錢
郵稅各金六錢

百人一首詳解

前華族女學校講師 近藤正一先生著 郵價 稅十 四三 錢錢

三十六歌仙集評釋

佐々木信綱先生題 千勝義重先生著 郵價 稅十 四五 錢錢

萬葉集評釋

萬葉集の和歌は難解にして國文を學ぶもの、常に難ずる處なり本書は眞字を普通の假名に改めて四季に類題を分ちて平易に釋義を試み且つ評言を加へたる珍書なりとす。 郵價 稅四 八十 錢錢

山家集評釋

目次を摘記すれば法師の略傳、俗にありし時の法師、脱俗後の逸事、當時の歌壇に於ける四行、四行自身の歌に對しての考、四行の詞藻、四行法師の自讃歌、閑寂の趣清逸の氣に富める幽韵にして高致なる歌、織麗巧緻なる歌と、戀の歌の面白きもの等を擧げ且つ歌調を評し語句を釋き、春夏、秋冬、戀、無常、神祇、釋教、祝賀、贈答悉く正確なる原本に依て、最も平易に全集を評解す。 郵價 稅二 四十 錢錢

新派和歌評釋

姫河原無鳴君著 郵價 稅二 四十 錢錢

文學士辰巳小次郎先生序、岩井松風軒著
遊仙窟評釋 郵價二十五錢

東京帝國大學教授文學博士芳賀矢一先生序
法學士 俣野節村先生編
傑作**模範紀行文集** 郵價三十錢

井口紫濤先生著
美文**和漢朗詠集評釋** 郵價二十五錢

名家文庫 第一編 美文
白砂青松 郵價二十五錢

與謝野鐵幹先生題、鹿島櫻菴先生著
名家**模範新派歌集** 郵價廿五錢

名家文庫 第二編 美文
清風明月 郵價二十五錢

與謝野鐵幹先生題、姬河原無鳴先生著
作解**新派和歌獨習** 郵價二十錢

名家文庫 第三編 美文
巖下滴泉 郵價二十五錢

伊藤銀月先生評、百字文會本部編
傑作**模範百字文集** 郵價廿五錢

名家文庫 第四編 美文
水村山郭 郵價二十五錢

井口紫濤君著
明治**大家美文資料** 郵價十五錢

名家文庫 第五編 美文
紅葉青山 郵價二十五錢

柳川春葉先生序、三津木春煙、井口紫濤兩君著
泰西**美辭資料** 郵價十八錢

名家文庫 第六編 美文
江山烟雲 郵價二十五錢

文學士 栗田木岡君序、渡邊幾石君著
美文**美辭麗句** 郵價十五錢

名家文庫 第七編 美文
閑雲野鶴 郵價二十五錢

文學士 栗田木岡君序、渡邊幾石君著
美文**美辭麗句** 郵價十五錢

名家文庫 第八編 美文
雪裡野梅 郵價二十五錢



274

274

終

